

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 服部正嗣

論文題目

Significance of the Splenic Vein and Its Branches in Pancreatoduodenectomy with Resection of the Portal Vein System


(門脈系合併脾頭十二指腸切除術における脾静脈およびその分枝の重要性)

論文審査担当者

主 査

委員

名古屋大学教授

柳野正人 

委員

名古屋大学教授

後藤秀寛 

委員

名古屋大学教授

横井香平 

指導教授

名古屋大学教授

小寺泰弘 

論文審査の結果の要旨

門脈（PV）・上腸間膜静脈（SMV）浸潤を伴う膵頭部癌に対するPV・SMV合併膵頭十二指腸切除の際の脾静脈（SV）の切離とその分枝の下腸間膜静脈（IMV）の温存の影響を検討した。SVを切離することにより、術後6か月で有意な血小板数低下と高率な側副血行路の出現を認め、有意ではないものの脾体積の増大を認めたことから、SV切離により左側門脈圧亢進が出現することが確認された。しかし、血小板数は低下を認めたものの平均16.2万と臨床的に許容される範囲で、血小板数・側副血行路出現率ともに術後1年以降ではSV温存と差を認めておらず、長期的にはSV切離は大きな問題とならず、SV再建は不要であると考えた。また切離されたSVにIMVが温存されていた場合、有意ではないものの血小板の減少と脾体積の増大を認めており、SVにIMVが温存されても左側門脈圧亢進の出現を防ぐことには寄与しない結果となった。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. PV・SMV合併切除においてSVを切離することは、何らかの影響を有するものの臨床的に大きな問題とはならないとの印象のみに基づいて本術式が施行されてきたが、その臨床的影響・意義の検証は行われておらず、文献的にも少数例からの報告のみであった。本研究における141例からの検証結果によりSVを切離することは临床上大きな問題とならず、また積極的に分枝を温存することは有意義でないことを検証できた。
2. SVを切離したのち一時は左側門脈圧亢進症を呈するが、脾を介さない側副血行路の発達により一旦減少した血小板数は増加に転じるものと考えられる。また長期的には微小な側副血行路が発達し、その結果、画像上指摘できる側副血行路が減少したものと考えられる。
3. SV切離群と温存群とで長期的な血小板数に差を認めておらず、術後化学療法の導入率、導入までの日数についても両群で差を認めない結果であった。
4. 膵癌という悪性度の強い疾患の特徴上、2年間の検証期間中に、再発や病状の悪化、死亡などのイベントを高率に認めた。再発を認めた症例は解析対象から除外としたが、2年経過時においてSV切離群、SV温存群ともに約半数に及んだ。
5. SV切除後に再建を行うことに関して検証を行った報告がされているが、少数例からの報告にとどまっている。一般的にはSV切離後の再建は行われていないものと考えられる。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	服部正嗣
試験担当者	主査		柳野正人	後藤秀実
	指導教授		小寺泰弘	横井香平

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 本研究の結果が実臨床における術式や治療におよぼす影響について
2. 脾静脈切離後、一旦低下した血小板数が回復し、出現した側副血行路が消失するメカニズムについて
3. 脾静脈切離の術後化学療法への影響について
4. 研究対象症例における癌の再発や病状悪化による除外について
5. 海外における脾静脈切離後の再建の動向に関する報告について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、消化器外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。